



京都市右京区まちづくり支援制度交付金事業
地域交響プロジェクト交付金（京都府）

かつて京の都は大堰川（保津川）
の水運によって作られました。
伝統の十二連筏（約50m）に
見て触れて、雄大なる嵐山と
壮大なる筏の歴史を
実感してください。

とき：令和2年2月2日（日）

午前中 嵐山通船北浜にて筏組み。
千鳥ヶ淵にて12連（約50m）
の筏に仕上げる。
午後2時頃 千鳥ヶ淵付近より筏流し

場所：渡月橋より上流にて
見学無料

主催：京筏組（保津川筏復活プロジェクト連絡協議会）
京都先端科学大学民俗学研究室 NPO 法人プロジェクト保津川
後援：一般社団法人京都府木材組合連合会 京北銘木生産協同組合
京北森林組合 京都先端科学大学研究・連携支援センター
協力：嵐山保勝会 嵐山通船株式会社 琴ヶ瀬茶屋
京都府立林業大学校 有限会社南丹運送 保津川遊船企業組合

◆ 問い合わせ先
京都先端科学大学民俗学研究室
✉ folklore@kuas.ac.jp

※雨天時の開催有無、イベントの進行
状況はツイッターにてご確認ください。



@kyoikadagumi

◆ 保津川筏復活プロジェクト連絡協議会

公式サイト <https://kyo-ikada.org/>



表紙画像：明治～大正期の大堰川の筏流しの様子（絵はがき）

京都・嵐山 大堰川に筏が流れます



京筏組のご紹介

京都・大堰川(保津川)の筏流しとは？！

かつて、大堰川(保津川)には丹波山地で伐り出された材木を運ぶ筏流しが盛んにおこなわれていました。その歴史は古く、奈良時代にまでさかのぼるといわれています。

大堰川の筏流しは、材木や商品の運搬によって京の都の人々の暮らしを支えた一方で、たとえば足利尊氏による天龍寺造営や豊臣秀吉による大坂城や伏見城築城など、その時代の大事業においても大きな貢献を果たし、時の権力者からも特別な地位を認められてきました。江戸時代末期には経済の発達にともなって輸送も飛躍的に増加し、最盛期には毎年90万本もの材木が京都・大坂に送られ、大堰川流域は大きく栄えることとなります。

半世紀ぶりの筏復活をめざして！

古代から近世にかけて大きく栄えた大堰川の筏流しですが、明治・大正期の山陰本線の開通や国道の整備によるトラック輸送の普及とともに次第に衰退し、戦後しばらくして完全に途絶えてしまいました。そこで私たち、京筏組は、2007年8月に日吉ダム(南丹市日吉町)で行われた天若湖アートプロジェクト2007において、元筏土の方々の指導のもと、伝統的な技法による筏の復元を行いました。2008年に約60年ぶりに保津大橋(亀岡市保津町)からかつて筏の中継地であった山本浜(同篠町)まで、2009年に保津峡・落合から嵐山までの筏流しを復活し、さらに2014年亀岡、2017年嵐山にて、12連約50mの筏を復活することができました。また筏流しを広く知っていただくために2011年より試乗体験イベント「いかにのってみよう！」を開催しています。2016年には一連の取り組みが評価され、第40回全国育樹祭(京都府)にて、京都府緑化等功労者「森の京都と木の文化発信部門」を受賞しました。

京筏組は、この貴重な歴史遺産を多くの方々が体験し、かつて流域を結んだ川の営みを実感していただくことで、「筏がつなぐ歴史の記憶」を甦らせたいと考えています。



保津峡を下る筏 2009年9月9日



いかに試乗会 2012年9月15日



嵐山で復活した12連筏 2017年12月17日



亀岡で復活した12連筏 2014年2月16日 写真提供：日向工房

京都先端科学大学 & 京都府立林業大学校のみなさん

京筏組のイベントでは、京都先端科学大学、京都府立林業大学校などの学生のみなさんが、各々専門知識や体力を活かし、筏の歴史の展示物の作成、いかに作りやいかに流しに活躍しています。若者たちが、大堰川の歴史を実体験し共有することで、大堰川の文化を次の世代へと引き継いでくれることを願っています。

